

【優秀賞】

「若者がつなぐ北方領土の未来」

市立札幌開成中等教育学校

3年 棟朝 遥香

「私は、若い人に思いをつないでいく最後の人だと思っています。北方領土問題について、若い人をお願いしたいと思っています。国際世論に働きかけて欲しい。世界の人と仲良くして欲しい。私は、そう願っています。」

これは、国後島の元島民で八十歳を超える今も語り部をされている佐々木さんの言葉です。北方領土ポスターコンクールの授賞式で聞いた佐々木さんが話して下さった言葉の一つ一つには、深い悲しみと切実な願いが入り混じっていました。

国後島は、自然豊かな美しい島で、楽しいことがたくさんあったそうです。しかし、ソ連に奪われ、日本人が自由に島に行けなくなって七十五年以上経ちました。佐々木さんが自由訪問で国後島に行けることになった時、生まれ故郷の村キナシリに行けることを心待ちにしていたそうです。しかし、上陸できたのは港まででとても悲しく無念だったそうです。

佐々木さんは静かにこう訴えます。「戦争は絶対にだめ。どんなに時間が掛かっても話し合いをして欲しい。」と。北方領土には現在、多くのロシア人二世、三世の人達が暮らしています。その人達に同じ思いをして欲しくはない、という佐々木さんの強い思いが詰まった言葉だと私は思います。

先日、終戦直後のソ連の占領下での色丹島島民とソ連の人々との生活を描いた「ジョバンニの島」という映画を観ました。驚いたことは、日本とソ連の人々が混住していた時代があり、子どもたちは共に遊び、学校ではお互いの国の歌を笑顔で歌い、幸せに暮らす姿が描かれていたことです。状況が激変し日本人が北方領土から強制退去させられる時、主人公の淳平と隣人で友人となったターニャが、突然訪れた別れを惜しみ、必死に互いを探す姿には、確かな友情が表れていました。

その映画を通して、私は気付かされたことがあります。それは、お互いの国が置かれている状況と、人々の交流の中で生まれ築かれた個々の思いというものは、まったく別のものである、ということです。お互いの国がどんな状況であっても、人々は心を通わせ友人になれることをこの映画は教えてくれました。私はここに北方領土問題の解決の糸口があるように思うのです。

北方領土返還に向けて日本人が声を上げることは大切なことだと思います。しかし、それだけでは一方通行になりかねません。日本人とロシア人が過去の出来事を互いに正しく認識し、お互いの交流を通して、友情を育み信頼を築くことが大切だと私は考えます。過去からお互いの未来についてどう考えるかを話し合うことが大切だと私は思います。そうすることで、未来思考の解決策が生まれると思うからです。

そのために出来ること、その一つ目は、日本とロシアの若者同士が友好関係を築いていくことです。二国間のホームステイやオンラインによる学校同士の交流活動を実現することがその礎になると考えます。二つ目は、私達日本の若者が戦争について知ることです。私の学校では、生徒自らが企画し行う奉仕活動があります。私はその活動で「ジョバンニの島」の上映会を行いました。一人でも多くの

若者に北方領土について関心を持ってもらいたいと思ったからです。

佐々木さんの願いが実現する日まで、私達若者がその思いを未来につないでいきたいと思っています。